

伊勢物語 第六十九段

むかし、男ありけり。その男伊勢の国に、狩の使いにいきけるに、かの伊勢の斎宮なりける人の親、「常の使よりは、この人、よくいたはれ」といひやれりければ、親のことなりければ、いと懇にいたはりけり。

朝には狩にいだし立ててやり、夕なりは帰りつゝそこに来させけり。かくて懇にいたづきけり。二日といふ夜、男、われて「あはむ」といふ。

女もはた、いと逢はじとも思へらず。されど、人目しければ逢はず。使実とある人なれば、遠くも宿まず。

女の寝屋近くありければ、女、人をしづめて、子一つばかりに、男のもとに来たりけり。

男はた寝らざりければ、外の方を見いだして臥せるに、月のおぼろなるに、小ナキ童を先に立てて、人立てり。男いとうれしくて我が寝る所に、率ていり、子一つより丑三つまゝあるに、まだ何事も語らぬに、帰りにけり。

男いと悲しくて、寝ずなりにけり。つとめていぶかしけれど、わが人をやるべきにしもあらねば、いと心もなくて待ちをれば、明けはなれてしばしあるに、女のもとより言葉はなくて、

君やこし我や行きけむおもほえず

夢かうつゝか寝てか醒めてか

男いといたう泣きてよめる。

かきくらす心の間にまよごこき

夢現とはこよひ定のよ

とよみてやりて、狩に出るぬ。

野にありければ心はさらごこて、

つよひだに人しづめて、いととく逢はむ

と思ふに、国守、斎宮のかみかけたる、狩の使ありと聞きて、夜ひと夜酒飲みしければ、もはら逢ひごとをもえせず、明けは尾張の国へたちなむとすれば、男も人知れず血の涙を流せどもえあはず。夜やうやう明けなむとするほどに、女方よりいだすまがづきの皿に、歌を書きていだしたり。とりて見れば、

かぢ人の渡れどぬれぬ江にしあれば

と書きて、末はなし、

そのまがづきの皿に、続松の成して歌の末を書きつぐ。

またあふさかの関は越えなむ

とて、明くれば、尾張に国へ越えにけり。斎宮は水の尾の御時、文徳天皇の御むすの、惟高の親王の妹。

